



英語母語話者による作文における確信度副詞使用： 地域・職業・トピックの違いに基づく比較

飯島, 真之

(Citation)

Learner Corpus Studies in Asia and the World, 6:185-198

(Issue Date)

2024-03-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487723>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487723>



英語母語話者による作文における確信度副詞使用

—地域・職業・トピックの違いに基づく比較—

飯島 真之(神戸大学大学院生)

Adverbs of Certainty Used by Native Speakers of English in Written Essays

—Comparisons Based on Regions, Occupations, and Topics—

IJIMA, Masayuki (Kobe University, Graduate Student)

概要

本研究は、アジア圏国際英語学習者コーパスである ICNALE の英作文モジュールに含まれる英語母語話者データを使用し、確信度副詞(adverbs of certainty: ADC) (certainly, definitely, surely, probably, maybe, perhaps 等)使用が、(1)母語話者の地域(アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ)、(2)母語話者の職業(学生、教師、その他職業)、(3)英作文のトピック(大学生アルバイトの是非とレストランにおける全面禁煙の是非)の違いによってどのように異なるかを、頻度調査を通じて考察した。その結果、(1)地域差については、アメリカの母語話者は *definitely* や *absolutely* などの主観的で感情的な強意型 ADC を使用し、(2)職業差については、特に学生が *definitely* や *absolutely* などの主観的で感情的な強意型 ADC を使用し、(3)英作文のトピック差については、「レストランの全面禁煙の是非」において、証拠性に関する *clearly* や主観的な *definitely* 等が一定頻度使用されることなどが示唆された。

キーワード

確信度副詞(ADC)、英語母語話者、地域、職業、トピック

1. はじめに

言語使用において、話し手や書き手は、個人的感情、態度、価値判断、評価といったスタンスを受け手である聞き手や読み手に提示する(Biber et al., 1999, p.966)。本研究では、現代英語におけるスタンス副詞のうち、確信の度合いに関わる副詞(*certainly, definitely, surely, probably, maybe, perhaps* 等)に焦点をあてる。本研究では、これらの副詞を確信度副詞(adverbs of certainty: ADC)と呼び、強意型 ADC (*certainly, definitely, surely* 等)と緩和型 ADC (*probably, maybe, perhaps* 等)の2区分に整理して言及する(飯島, 2023a 他)。

ADC については、これまでコーパスを用いて英語学及び英語教育学の両側面から様々な研究がなされてきた。特に後者においては、学習者コーパスを用いて、対象とする地域の学習者データを英語母語話者データと比較することで、学習者の語彙使用の特徴を考察する研究がこれまでも

多く実施されてきた。しかしながら、学習者コーパスを用いた過去の ADC 研究では、学習者データの比較対象となる母語話者データにおける ADC 使用が、地域、職業、作文や発話のトピックといった属性の違いによってどのように変化しうるかという点までは考察がなされていないようである。Granger (2015) において提示された、中間言語対照分析 (Contrastive Interlanguage Analysis: CIA) モデルでは、中間言語と比較される参照言語の多様性が強調されており、さらに、当該モデルでは、参照言語間の比較についても示唆がなされている。これらを踏まえ、本研究では、英語学習者コーパスに含まれる母語話者データに着目し、データを母語話者の地域 (RQ1)、職業 (RQ2)、トピック (RQ3) という 3 つの属性に基づいて分類し、母語話者の ADC 使用が属性によってどのように異なるかを考察する。本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパス (ICNALE) の英作文モジュールである Written Essays (2.6) の母語話者データを使用し、当該データを、RQ1 では地域別 (アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド) に、RQ2 では職業別 (大学生、教師、その他職業) に、RQ3 では作文のトピック別 (大学生のアルバイトの是非とレストランにおける全面禁煙の是非) に分類し、母語話者の属性の違いが ADC 使用の違いにどのように反映されるかを調査する。

2. 先行研究

先行研究を整理する前に、本節ではまず、本研究が対象とする ADC を整理する。飯島 (2023a) では、ADC として 45 種の副詞を選択し、それらを強意的な意味合いを持つ ADC (強意型 ADC) 31 種と緩和的意味合いを持つ ADC (緩和型 ADC) 14 種の 2 区分に分類した。本研究においても同様の ADC を研究の対象とする。具体的な個々の ADC は下表の通りである。

表 1. 現代英語における ADC (飯島, 2023a)

区分	語数	個別 ADC
強意型 ADC	31	absolutely, admittedly, assuredly, avowedly, certainly, clearly, decidedly, doubtless, evidently, definitely, incontestably, incontrovertibly, indeed, indisputably, indubitably, ineluctably, inescapably, inevitably, manifestly, naturally, necessarily, obviously, patently, plainly, surely, truly, unarguably, unavoidably, undeniably, undoubtedly, unquestionably
緩和型 ADC	14	allegedly, arguably, apparently, conceivably, maybe, perhaps, possibly, presumably, probably, purportedly, reportedly, reputedly, seemingly, supposedly

以下、これまで実施されてきた英語母語話者による ADC 使用に関する研究事例を示す (先行研究内では ADC という用語は使用されていない)。本章では、Suzuki and Fujiwara (2017)、Deng and Zhang (2022)、の 2 種の研究について説明する。いずれの研究もコーパスを用いて英語母語話者による ADC 使用を研究している。

Suzuki and Fujiwara (2017) は、現代イギリス英語のデータを収集した British National Corpus (BNC) を使用し、2 種の法副詞 (modal adverb) である conceivably と perhaps の差を、

法動詞(modal verb) (must, will/would, shall/should, can/could, may/might)との共起関係や、文内生起位置(initial, medial, final)の観点から考察を試みた。また、当該研究は、コーパス調査のみに基づく考察にとどまらず、30人の英語母語話者(15人のアメリカ英語母語話者と15人のイギリス英語母語話者)に対して、語彙選択タスクを実施することで、現代英語における2語の使われ方の差を検証した。その結果、コーパスの頻度調査では、conceivably は perhaps 以上に法動詞と共起し、perhaps は will/would と、conceivably は can/could や may/might と共起する傾向が高いことが示された。加えて、生起位置に関しては、perhaps が initial で最も高頻度で使用されるのに対し、conceivably は medial で最も高頻度で使用されることが示された。さらに母語話者に対して実施した語彙選択タスクの結果では、全体的に perhaps が possibly 以上に選択される傾向があり、perhaps は主に initial 位置の用法(特に、nonmodal/initial)として選択され、conceivably は主に modal としての用法(特に、modal/medial)として選択される傾向があることが示された。

次に、Deng and Zhang(2022)は、2018年から2019年における The Modern Language Journal から収集した60の研究論文のデータにおける、法確信度副詞(modal adverbs of certainty:MAC)(当該研究内での名称)(indeed, certainly, necessarily, naturally, clearly, obviously, arguably, admittedly 等)の使用実態を調査した。当該研究では、Simon-Vandenberg and Aijmer(2007)に基づき、MACを事前に認識(epistemic)、期待(expectation)、証拠(evidential)、発話行為(speech act)の4区分に分類している。その後、対象とする個々の副詞の頻度調査を実施している。その結果、MACの4区分の頻度関係は、epistemic > expectation > evidential > speech act の順となっており、epistemicとしてindeedが、expectationとしてnecessarilyが、evidentialとしてclearlyが、speech actとしてarguablyが高頻度な副詞として抽出された。さらに当該研究ではindeedをサンプルに、語義別頻度調査を実施し、MACの使用が、多義性(polysemy)等に影響される可能性を示唆している。

これらの研究は、英語母語話者のADC使用の実態を明らかにしようとしている点で示唆に富む。しかしながら、上記で取り上げた2種の研究は母語話者を属性ごとに考察を行っているわけではない。特に、英語学習者データの比較対象としての母語話者データにおけるADC使用が、属性別にどのように異なるかについて調査することは、英語教育の立場に立った場合、学習者の妥当な比較基準を検討する上でも必要になるのではないだろうか。飯島(2023b)ではすでに、ICNALEの英作文モジュールを用いて、アジアのEFL圏6地域(日本、中国、韓国、台湾、タイ、インドネシア)の学習者のADC使用を同コーパスに含まれる母語話者データと比較することで考察している。しかしながら、当該研究では、すべての母語話者データを一つのデータセットに統合して使用したため、母語話者の属性差がADC使用の差にどのように反映されるかに関する示唆を得ることはできていない。

そこで、本研究では、同様にICNALEの英作文モジュールにおける母語話者データを用いるが、当該データを(1)母語話者の地域、(2)母語話者の職業、(3)作文のトピック別に分類し、母語話者データを属性別に整理し、母語話者の属性がADC使用実態にどのように反映されるかを調

査する。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

本研究では、英語母語話者による英作文における ADC 使用が、(1) 母語話者の地域、(2) 母語話者の職業、(3) 作文のトピックの各属性によってどのように変化するかを考察する。研究設問 (RQ) は以下の 3 種である。

RQ1 母語話者の地域が異なれば、使用される ADC も異なるか

RQ2 母語話者の職業が異なれば、使用される ADC も異なるか

RQ3 英作文のトピックが異なれば、使用される ADC も異なるか

3.2 データ

本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパス (ICNALE) の英作文モジュールである *Written Essays* (2.6) に含まれる英語母語話者データを使用する。当該モジュールには、アジアにおける 10 地域の英語学習者 (中国、香港、インドネシア、日本、韓国、パキスタン、フィリピン、シンガポール、タイ、台湾) 及び英語母語話者 (アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ) から収集した英作文のデータが収録されている。データの収集過程において、各参加者に対して、2 種のトピック (大学生アルバイトの是非とレストランにおける全面禁煙の是非) に関する英作文を、1 トピックにつき、20 分から 40 分で、辞書を使用することなく 200 字から 300 字で執筆するよう依頼している (Ishikawa, 2023)。本研究では、ICNALE のウェブサイトから当該モジュールのデータをダウンロードし、そのうち、英語母語話者のデータを使用する。なお、当該データの頻度調査には、無償で利用可能なスタンドアロン型のコンコーダンスである、*AntConc* (4.2.4) を使用する。

3.3 手法

3.3.1 データの事前処理

はじめに、使用する英語母語話者データを、(1) 母語話者の地域、(2) 母語話者の職業、(3) 英作文のトピックの属性ごとに分類した 3 種のデータセットを作成する。なお、これらのデータセットはいずれも同一の母語話者データを分類したものである。下表は、各データセットにおける規模 (総語数) と作文数を提示したものである。

表 2. 本研究が使用する英語母語話者データ (ICNALE *Written Essays*, 2.6)

各データセットの区分		総語数	作文数
(1) 母語話者の地域別分類	アメリカ (USA)	51124	228
	イギリス (GBR)	12962	56
	オーストラリア (AUS)	7614	34
	ニュージーランド (NZL)	6123	26
	カナダ (CAN)	12790	56

(2) 母語話者の職業別分類	大学生	45028	200
	教師	20003	88
	その他職業	25582	112
(3) 英作文のトピック別分類	大学生アルバイトの是非 (PTJ)	45415	200
	レストランの全面禁煙の是非 (SMK)	45198	200

本研究は全体で 3 つの RQ によって構成されているが、RQ1 では、上表のデータセット(1)を、RQ2 ではデータセット(2)を、RQ3 ではデータセット(3)を使用する。次に、本研究が使用する母語話者データ全体において、24 種の ADC(強意型 ADC16 種と緩和型 ADC8 種)の頻度が確認された。下表はそれらを整理したものである。

表 3. データ中で使用されている ADC

区分	語数	個別 ADC
強意型 ADC	16	absolutely, admittedly, certainly, clearly, decidedly, definitely, indeed, inevitably, naturally, necessarily, obviously, plainly, surely, truly, undeniably, undoubtedly
緩和型 ADC	8	apparently, maybe, perhaps, possibly, presumably, probably, seemingly, supposedly

飯島(2023a)では、現代英語における ADC として 45 種を提示したが、今回使用するデータ中には、上記の 24 種が含まれており、本研究では、これらの ADC の頻度調査を実施する。

3.3.2 分析の手順

以下、各 RQ の手法を概観する。まず、RQ1 では、母語話者の地域別に、表 3 で示した個別 ADC の頻度調査を実施する。しかながら、地域ごとにデータの総語数が異なるため、データ全体に対する 1 万語あたりの頻度に粗頻度を調整する。その後、強意型 ADC、緩和型 ADC 別に、地域ごとに個別 ADC を頻度順に整理する。この際、特定の作文に頻度が著しく偏っている ADC については慎重な考察が必要となる。そこで、本研究では個別 ADC の頻度に加え、レンジ(使用されている作文数)及び、レンジ比率(%) (作文での使用率)を算出することで、個別の ADC が特定の作文に偏って使用されていないかを合わせて検証する。

RQ2 および RQ3 についても、同様の手法で調査を実施する。RQ2 では、母語話者の職業別に個別 ADC 頻度を調査し、RQ3 では、英作文のトピックごとに個別 ADC の頻度を調査する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 地域別母語話者が使用する ADC

はじめに、本節では、地域別母語話者によって使用される ADC がどのように異なるかを調査する。強意型 ADC に関して、地域別に各 ADC の頻度及びレンジを調査した結果、下表のようになった。

表 4. 地域別強意型 ADC(上位 4 位以内)

地域	ADC	粗頻度	1 万語あたりの 頻度	レンジ	レンジ比率 (%)
USA	definitely	15	2.93	14	6.14
	absolutely	11	2.15	11	4.82
	clearly	9	1.76	9	3.95
	indeed	8	1.56	7	3.07
GBR	certainly	7	5.40	7	12.50
	absolutely	5	3.86	5	8.93
	clearly	3	2.31	3	5.36
	truly	2	1.54	2	3.57
	naturally	2	1.54	2	3.57
AUS	clearly	2	2.63	2	5.88
	truly	2	2.63	2	5.88
	obviously	1	1.31	1	2.94
	necessarily	1	1.31	1	2.94
	admittedly	1	1.31	1	2.94
NZL	certainly	5	8.17	5	19.23
	clearly	3	4.90	3	11.54
	naturally	1	1.63	1	3.85
	indeed	1	1.63	1	3.85
CAN	certainly	7	5.47	6	10.71
	clearly	3	2.35	1	1.79
	truly	2	1.56	2	3.57
	indeed	2	1.56	1	1.79

上表を概観すると、アメリカの母語話者の強意型 ADC 使用は他地域の母語話者と異なっている印象を得る。アメリカでは *definitely* や *absolutely* がよく使用されている一方で、他地域では *certainly* や *clearly* が使用されている。なお、上表において *absolutely* については、アメリカだけではなく、イギリスにおいてもよく使われているが、言語変種を超えて 2 地域間で幅広く使用されている可能性が考えられる。なお、これらの語のレンジを見ると、カナダの *clearly* については、1 種の作文に偏っているが、他地域については極端な偏りは見られないようである。次に、これらの語における辞書の定義を概観した。*definitely* と *certainly* については、意味が似通っているが、『ウイズダム英和辞典』（第 4 版）（以下、ウイズダム）では、*certainly* が客観的証拠に基づいて使用されることが示唆されている。また、*absolutely* については、*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*（第 10 版）（以下、OALD）において、強い感情 (*strong feelings*) や極値的な質 (*extreme qualities*) に関する形容詞や動詞と共に使用されることが示唆されている。また、Simon-Vandengergen and Aijmer(2007) は、*clearly* が使用される際、内容が確固たる証拠 (*solid evidence*) に基づいていることを示唆している。これらを踏まえると、アメリカの母語話者は、主観的で感情的な強意型 ADC (*definitely* や *absolutely*) を使用する傾向がある一方で、他地域の母語話者はより理性的に確信を提示する ADC (*certainly* や *clearly*) を使用する可能性があるのではないだろうか。なお、*absolutely* の頻度が高いイギリスについては中間的な位置づけといえるのではないだろうか。しかしながら、アメリカ以外の地域については、データの

規模が小さく、地域によっては強意型 ADC の頻度が全体としてそもそも低い地域もあるため（オーストラリアは最も頻度が高い **clearly** でも粗頻度が 2）、過度な一般化は避けるべきであろう。

次に、緩和型 ADC についても同様の調査を実施した結果、下表の様になった。

表 5. 地域別緩和型 ADC (上位 4 位以内)

地域	ADC	粗頻度	1 万語あたりの 頻度	レンジ	レンジ比率 (%)
USA	probably	32	6.26	27	11.84
	perhaps	10	1.96	10	4.39
	maybe	7	1.37	7	3.07
	possibly	4	0.78	3	1.32
GBR	perhaps	4	3.09	4	7.14
	maybe	3	2.31	3	5.36
	probably	2	1.54	2	3.57
	possibly	1	0.77	1	1.79
	seemingly	1	0.77	1	1.79
AUS	maybe	6	7.88	3	8.82
	perhaps	4	5.25	4	11.76
	possibly	3	3.94	3	8.82
	probably	1	1.31	1	2.94
	supposedly	1	1.31	1	2.94
NZL	maybe	1	1.63	1	3.85
	possibly	1	1.63	1	3.85
CAN	perhaps	6	4.69	6	10.71
	maybe	4	3.13	4	7.14
	probably	3	2.35	2	3.57
	possibly	2	1.56	2	3.57

緩和型 ADC に関して、強意型 ADC と同様に、アメリカの母語話者は他地域の母語話者とは異なる傾向が見られる。特に、アメリカでは **probably** の頻度が最も高くなっている一方で、他地域では **maybe** や **perhaps** が使用されている。**probably** の強度は **maybe** や **perhaps** よりも高く (Huddleston & Pullum, 2002, p.768)、アメリカの母語話者は、緩和的な ADC であっても、比較的高い確信を提示する ADC を使用する傾向にあるのではないだろうか。なお、**perhaps** については、ウィズダムにおいて、イギリス英語においてより一般的であることが示唆されており、言語変種の差が結果に影響した可能性も考えられる。しかしながら、レンジを見ると、オーストラリアにおける **maybe** が一部の作文に偏っている傾向が見られ、また、ニュージーランドについては、そもそも緩和型 ADC 頻度が低く、過度な一般化は避けるべきであろう。

ここまで、地域別に個別 ADC に関して頻度調査を実施した。以下、アメリカの母語話者による作文とイギリスの母語話者による作文のうち、ADC が使用されているものを ICNALE から引用する。なお、以下に引用した作文は、いずれも一部分を引用したものである。

“Smoking should ***definitely*** be banned at all the restaurants in Japan. Many of the United States have banned smoking some years ago, and I think that there are ***probably*** a few other countries in the world that have already done so as well. (中略)

The fact that this happens to me is quite revolting, and I would assume that other people *probably* feel the same way, so it would make sense to ban smoking at restaurants because it will make them cleaner and longer lived.” (WE_ENS_SMK0_067_XX_1)

“If you use force, by legal compliance or otherwise, the Japanese Government would be taking away a person's or restaurant's choice and then what are they left with? *Perhaps* 0.01% less instances of cancer or related diseases. Kowtowing to the minority who happen to be either allergic to or who just resent smoking and smokers, is *clearly* not the answer.” (WE_ENS_SMK0_002_XX_1)

前者が、アメリカの母語話者による作文であるが、*definitely* が自身の立場を明示的に示す文において使用されている。加えて、*probably* が確実性は低いものの、推測に基づいて意見を提示する場合に使用されている。次に、後者のイギリスの母語話者による作文では、*clearly* が自身の立場を示す際に使用されている。また、数字を提示する際、それがあくまでも推測であることを示唆するために、確信の低い *perhaps* が使用されている。

4.2 RQ2 職業別母語話者が使用する ADC

次に、母語話者データを職業別に区分し、ADC の頻度調査を行った。はじめに、強意型 ADC に関して下表の結果を得た。

表 6. 職業別強意型 ADC (上位 4 位以内)

職業	ADC	粗頻度	1 万語あたりの頻度	レンジ	レンジ比率 (%)
大学生	<i>definitely</i>	13	2.89	12	6
	<i>absolutely</i>	10	2.22	10	5
	<i>clearly</i>	8	1.78	6	3
	<i>certainly</i>	4	0.89	4	2
	<i>truly</i>	4	0.89	4	2
教師	<i>certainly</i>	9	4.50	8	9.09
	<i>clearly</i>	5	2.50	5	5.68
	<i>indeed</i>	5	2.50	4	4.55
	<i>truly</i>	3	1.50	3	3.41
他の職業	<i>certainly</i>	9	3.52	9	8.04
	<i>clearly</i>	7	2.74	7	6.25
	<i>indeed</i>	4	1.56	4	3.57
	<i>truly</i>	4	1.56	4	3.57
	<i>absolutely</i>	4	1.56	4	3.57

上表を概観すると、大学生の強意型 ADC 使用は、教師や他の職業の母語話者とは異なっている。具体的には、大学生は *definitely* や *absolutely* をよく使用している一方で、教師や他の職業の母語話者は *certainly*、*clearly*、*indeed* を使用している。なお、レンジを見ると、いずれの ADC も特定の作文に大きく偏って使用されていないようである。前節でも言及したように、*definitely* や *absolutely* は主観的、あるいは感情的に確信を提示する ADC であると推測され、*certainly*

や **clearly** については、より理性的に確信を提示する ADC であると推測される。なお、**indeed** については、**OALD** は、陳述に情報を付加する際にも使用されうることを示唆しており、**indeed** が論の組み立てを行う上で使用されやすい可能性が考えられ、**indeed** についても理性的に物事を論じる上で使用されやすい ADC といえるのではないだろうか。以上を踏まえると、大学生は、教師や他の職業の母語話者以上に、主観的あるいは感情的な強意型 ADC を使用し、教師や他の職業の母語話者はより理性的に確信を提示する ADC を使用する可能性がある。

次に、緩和型 ADC についても職業別に頻度調査を実施した。

表 7. 職業別緩和型 ADC (上位 4 位以内)

職業	ADC	粗頻度	1 万語あたりの頻度	レンジ	レンジ比率 (%)
大学生	probably	29	6.44	24	12
	perhaps	8	1.78	8	4
	maybe	8	1.78	5	2.5
	possibly	5	1.11	4	2
教師	perhaps	8	4.00	8	9.09
	probably	5	2.50	4	4.55
	maybe	4	2.00	4	4.55
	possibly	2	1.00	2	2.27
他の職業	maybe	9	3.52	9	8.04
	perhaps	8	3.13	8	7.14
	probably	4	1.56	4	3.57
	possibly	4	1.56	4	3.57

上表を概観すると、強意型 ADC と同様に、大学生の緩和型 ADC 使用傾向は、教師や他の職業の母語話者とは異なっている。具体的には、大学生は 3 種の職業属性の中で最も **probably** を使用している一方で、教師や他の職業の母語話者は **maybe** や **perhaps** を使用している。なお、これらの ADC のレンジを見ると、大学生の **probably** において若干の偏りがあるように思われるが、概ね、特定の作文に極端に偏って使用されていないようである。前節でもすでに述べているが、**probably** の強度は **maybe** や **perhaps** よりも高いとされる (Huddleston & Pullum, 2002, p.768)。大学生は、教師や他の職業の母語話者と比較すると、**probably** のような緩和的な ADC であっても比較的確信度が高いものを使用する傾向があるように思われる。

ここまで、職業別に個別 ADC に関して頻度調査を実施した。強意型 ADC、緩和型 ADC ともに大学生は他の職業属性の母語話者とは異なる ADC 使用を見せるようであるが、この点については、職業属性以上に、母語話者の年齢が影響している可能性も考えられる。

以上が、職業属性別の ADC の頻度調査の結果である。以下、大学生の作文と他の職業の母語話者による作文のうち、ADC が使用されているものを ICNALE から 1 種類ずつ引用する。なお、引用箇所は作文の一部である。

“I think that is **probably** important for college students to have a part-time job in college because everyone is always talking about this issue, and my parents have

always strongly encouraged me to get a part-time job. (中略) If I feel that I'm able to deal with both classes and work in a manner which is acceptable to me, I will ***definitely*** pursue part time work, and at that time, my opinion will ***probably*** be that college students should always without a doubt have a part-time job. However, if I find that I do not have enough time, I will ***probably*** begin to think that it is not so important for college students to have a job. (中略) What might be too much work for me is ***probably*** a comfortable amount of work for someone else, and so our decisions would differ based on that.” (WE_ENS_PTJ0_069_XX_1)

“I agree. Students get more experience, or ***perhaps*** their first job experience which will look very nice on their job applications. They ***certainly*** increase their workloads which may be good for some and bad for others which really depend on how the students handle pressure. A few weeks of working and fulfilling their study requirements will soon tell if they can deal with it or not. The money will always come in handy and some desperately need it. ***Possibly*** they will gain some transferable skills such as money management, time management, communications skills” (WE_ENS_PTJ0_192_XX_3)

前者の大学生によって書かれた作文では、**probably** が頻繁に使用され、作文全体として緩和的なスタンスがとられている。前者の作文には、緩和的でありながら、一定の確信を伴う ADC である **probably** を好む大学生の傾向が表れているのではないだろうか。その一方で、自身の明示的な立場に関する箇所については **definitely** を使用し、強調を行っている。次に、後者のその他の職業の母語話者によって書かれた作文では、主張箇所において **certainly** を使用することで、自身の立場が明示的に示されている。また、確実性の保証はないが、可能性として言及する場合には **perhaps** や **possibly** などの確信度の低い ADC が使用されている。頻度調査でも示したように、職業属性が異なれば、使用される ADC に差が生じることがいえるだろう。

4.3 RQ3 トピック別に使用される ADC

最後に、母語話者データをトピック別に区分し、頻度調査を実施した。はじめに、強意型 ADC に関して下表の結果を得た。

表 8. トピック別強意型 ADC (上位 4 位以内)

トピック	ADC	粗頻度	1 万語あたりの頻度	レンジ	レンジ比率 (%)
PTJ 大学生アルバイトの是非	certainly	13	2.86	13	6.5
	clearly	8	1.76	8	4
	definitely	6	1.32	5	2.5
	indeed	6	1.32	5	2.5
	truly	6	1.32	6	3
SMK レストランの全面禁煙の是非	clearly	12	2.65	10	5
	absolutely	11	2.43	11	5.5
	definitely	10	2.21	10	5
	certainly	9	1.99	8	4

上表を概観すると、2 種のトピック間では、母語話者が使用する ADC に違いが見られる。レンジ

を見ると、上表で示したいずれの ADC も、一部の作文に極端に偏って使用されていないようである。個別の ADC を見ると、PTJ では *certainly* が、SMK では *clearly* が *certainly* の頻度を上回り最も使用されている。*certainly* も *clearly* も理性的に確信を提示する ADC と言えるが、前述の通り、*clearly* は確固たる証拠の存在を示唆し (Simon-Vandenberg & Aijmer, 2007)、母語話者は SMK の作文において、確証の高い主張を行っている可能性がある。しかしその一方で、*absolutely* や *definitely* もまた SMK でよく使用されている。*clearly* とは異なり、2 語は主観的で感情的に確信を提示すると推測される。この背景には、SMK が、PTJ 以上に客観的な事実を提示しやすい文脈であると同時に、トピックに親しみのない母語話者 (例: 喫煙に関心のない母語話者等) が、主観や憶測に偏った主張を行う可能性のある文脈であることが関係しているのではないだろうか。

次に、緩和型 ADC についても、トピック別に頻度調査を実施した。

表 9. トピック別緩和型 ADC (上位 4 位以内)

トピック	ADC	粗頻度	1 万語あたりの頻度	レンジ	レンジ比率 (%)
PTJ 大学生アルバイトの是非	<i>probably</i>	18	3.96	15	7.5
	<i>perhaps</i>	12	2.64	12	6
	<i>possibly</i>	9	1.98	8	4
	<i>maybe</i>	8	1.76	8	4
SMK レストランの全面禁煙の是非	<i>probably</i>	20	4.42	17	8.5
	<i>maybe</i>	13	2.88	10	5
	<i>perhaps</i>	12	2.65	12	6
	<i>apparently</i>	2	0.44	2	1
	<i>possibly</i>	2	0.44	2	1

上表を概観すると、強意型 ADC ほどではないが、緩和型 ADC においてもトピック間で使用される ADC に若干の差が見られる。2 種のトピックにおいて、*probably* が最も使用されているという点は共通しているが、PTJ の方が *possibly* の頻度が高く、SMK の方が *maybe* の頻度が高い。なお、いずれの ADC のレンジも、概ね、一部の作文に極端に偏って使用されていないようである。Ozaki (2012) は、*possibly* は、はっきりとはしないものの可能性のある事柄を述べる際に使用され、*maybe* は、話し手や書き手が主張する命題が不確かである際に使用され、命題が大雑把な推測 (wild guess) であり、個人の信念やより強い理由に基づいていることを示唆している。これらに基づくと、*maybe* は *possibly* 以上に主観性が強く反映される ADC ということができ、SMK は、事実を提示しやすい文脈であると同時に、母語話者の主観性も強く反映されやすい文脈といえるのではないだろうか。

以上が、トピック別の ADC の頻度調査の結果である。以下、各トピックの作文のうち、ADC が使用されているものを ICNALE から 1 種類ずつ引用する。なお、引用箇所は作文の一部である。

“Apart from improving students' employability after graduation, it will *certainly* help improve their financial situation. They would also learn more about budgeting,

take some financial responsibility and basically improve or should I say that it would give them the opportunity to improve their money handling skills.” (WE_ENS_PTJ0_138_XX_2)

“I disagree with the opinion that smoking should be completely banned from all restaurants in the country. Why do I hold such an opinion in today's age of scientific proof that so clearly shows how harmful second hand smoke is to others? (中略) Smoking in a public place like a bank or work office is clearly a different matter and I agree that smoking should be banned in these areas. However, restaurants are privately owned establishments and are not providing a necessary public service at a location which we must visit. (中略) Nobody's rights are being violated as long as we all still have a choice. Banning smoking in all restaurants is clearly such a violation.” (WE_ENS_SMK0_093_XX_1)

上記に引用した作文を見ると、前者の PTJ の作文では *certainly* が使用されており、後者の SMK の作文では *clearly* が使用されている。PTJ の作文では、第一文目において *certainly* を使用することで自身の立場が明示的に示されている。一方 SMK の作文では、*clearly* が複数回使用されているが、最初の *clearly* は *scientific proof* という表現と共に使用され、2 番目の *clearly* が使用されている文では、*bank* や *work office* といった具体例の提示が見られることから、*clearly* が根拠や事実を踏まえた主張であるような印象を得る。トピック間の文脈の違いが、使用される ADC に一定の影響を与えているのではないだろうか。

5. まとめ

本研究では、ICNALE の英作文モジュールに含まれる英語母語話者データを用いて、(1) 母語話者の地域 (RQ1)、(2) 母語話者の職業 (RQ2)、(3) 英作文のトピックの違い (RQ3) が ADC 使用の違いにどのように反映されるかを調査した。

RQ1 では、母語話者の地域の違いが ADC 使用の違いに反映されるかを調査した。その結果、強意型 ADC に関しては、アメリカの母語話者は、*absolutely* や *definitely* といった主観的で感情的であると推測される ADC を使用し、他地域の母語話者ほど理性的に確信を提示する ADC を使用しない可能性があることが示された。緩和型 ADC については、アメリカの母語話者は、緩和的であるが一定の確信を伴う *probably* を使用する一方、他地域と比較すると *maybe* や *perhaps* 等の確信度が低い ADC の頻度が低くなる可能性が示された。

RQ2 では、母語話者の職業の違いが ADC 使用の違いに反映されるかを調査した。その結果、強意型 ADC に関しては、大学生が *definitely* や *absolutely* などの主観的で感情的な ADC を使用する一方で、教師や他の職業の母語話者は *certainly* や *clearly* 等の理性的に確信を提示する ADC を使用する傾向がある可能性が示された。緩和型 ADC に関しては、大学生は一定の確信を提示する *probably* を使用する一方で、教師やその他の母語話者は *maybe* や *perhaps* 等の確信度の低い ADC を使用する可能性が示された。

RQ3 では、英作文のトピックの違いが ADC 使用の違いに反映されるかを調査した。その結果、強意型 ADC に関しては、しばしば根拠や証拠を示唆する *clearly* の頻度が SMK (レストランにお

ける全面禁煙の是非)において高いことが示された。同時に、主観的で感情的な主張に関連すると推測される *absolutely* や *definitely* もまた、SMK で一定頻度使用される可能性があることが示された。緩和型 ADC に関して、SMK では *maybe* が、PTJ(大学生アルバイトの是非)では *possibly* が一定頻度使用される可能性があることが示された。

本研究の結果は、学習者の ADC 使用を考察するにあたって、しばしばその比較対象となる母語話者データの特徴を理解するための示唆となりうるのではないだろうか。Gilquin(2022)は、学習者コーパス研究は一つの規範に制限される必要はないと指摘しており、非英語母語話者の ADC 使用の特徴をより適切に考察するには、比較対象としてより適切な母語話者データの選択が必要といえる。

しかしながら、本研究には一定の課題も存在する。1 点目はデータセットの規模である。本研究では、COCA や BNC などの現代英語コーパスではなく、学習者コーパスである ICNALE 内の英語母語話者データを使用した。当該データを母語話者の属性別にさらに区分すると、1 つ当たりのデータセットの規模(総語数)が小さいものになってしまう。特に、今回は RQ1 における地域別比較において、この課題が顕著に現れ、アメリカ英語母語話者以外のデータセットについては、データ規模が小さくなっている。そのため、抽出される ADC の頻度も当然少なくなり、本研究から得られた結果の一般化には慎重な判断が必要である。

2 点目は、本研究では、RQ ごとに 1 種類の属性(要因)に基づいて、母語話者データを調査した。しかしながら、2 要因以上の関連(アメリカの大学生等)と ADC 使用の関係がどのようであるかまでは考察することができていないため、今後調査が必要である。

3 点目は、本研究は作文における語の頻度の偏りをレンジによって判断したが、本研究におけるレンジは、あくまでも個別の ADC が使用されている作文数をそのまま示した値である。使用範囲の偏りをより客観的に調査するには、レンジ以外の指標についても検討する必要があるだろう。以上 3 点を本研究における課題としたい。

引用文献

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Longman.
- Deng, R., & Zhang, Y. (2022). An analysis of modal adverbs of certainty in linguistic academic discourse. *International Journal of Languages, Literature and Linguistics*, 8(2), 100–104.
- Gilquin, G. (2022). One norm to rule them all? Corpus-derived norms in learner corpus research and foreign language teaching. *Language Teaching*, 55(1), 87–99.
- Granger, S. (2015). Contrastive interlanguage analysis: A reappraisal. *International Journal of Learner Corpus Research*, 1(1), 7–24.
- Huddleston, R., & Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge University Press.

- 飯島真之(2023a). 「コーパス言語学の手法に基づく英語確信度副詞の抽出と使用範囲の解明: CORE コーパスの 33 種のレジスター別頻度調査に基づいて」. 『中部地区英語教育学会紀要』, 52, 31–38.
- 飯島真之(2023b). 「日本人学習者の英作文における確信度副詞使用実態: アジアの EFL 圏 6 地域の比較」. 『統計数理研究所共同研究レポート』, 465, 34–54.
- 井上永幸・赤野一郎(編)(2019). 『ウィズダム英和辞典』(第 4 版). 三省堂.
- Ishikawa, S. (2023). *The ICNALE guide: An introduction to a learner corpus study on Asian learners' L2 English*. Routledge.
- Lea, D., & Bradbery, J. (Eds.) (2020). *Oxford advanced learner's dictionary of current English* (10th Ed.). Oxford University Press.
- Ozaki, S. (2012). Analysis on the use of synonymous adverbs: *Maybe, perhaps, possibly, probably, and likely*. *Journal of Nagoya Bunri University*, 12, 75–87.
- Simon-Vandenberg, A. M., & Aijmer, K. (2007). *The semantic field of modal certainty: A corpus-based study of English adverbs*. Mouton de Gruyter.
- Suzuki, D., & Fujiwara, T. (2017). The multifunctionality of 'possible' modal adverbs: A comparative look. *Language*, 93(4), 827–841.

コーパス及びコンコーダンス

AntConc (4.2.4). <https://www.laurenceanthony.net/software/antconcl>

Written Essays (2.6), The International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE). <https://language.sakura.ne.jp/icnale/>